

松江藩の支城城下町

—富田・三刀屋・赤名—

大阪歴史博物館 松尾信裕

はじめに

寛永 10 年（1633）に作製された「出雲国図」に「古城」と記載された城。

堀尾期（慶長 5 年（1600）～寛永 10 年）に富田・三刀屋・赤名・亀嵩の城がある [中井均 2012]。

出雲の山城は戦国時代から江戸時代の元和元年（1615）の一国一城令の発布までは存在していた。

それら山城の山麓には規模は小さいが、城下町が形成されている。

『松江市史別編 松江城』を頼りに、堀尾期における松江城の支城城下町を観察する。

それらの城下町の構造を概観し、町の構造の特徴を抽出する。

その他の地域に残る城下町や陣屋町と比較し、堀尾期の支城城下町との共通点を探る。

1. 城下町の形

戦国期城下町の構造は**山城＋山麓居館＋武家屋敷地＋直属商工業者屋敷**という構造で共通している。

山麓居館は城郭に当たるもので、城主の居館の周囲に役所や家臣団屋敷地が集まる。

領主と主従関係にあった直属商工業者の屋敷地は武家地と混在していた。

主従関係のない職商人の町は「市町」あるいは「宿町」として居館や武家地から離れて存在していた。

戦国末期になると城下町に街道を取り込み、その両側に職商人が居住する町人地を配置。

街道を居館や武家地の前面に通すため、一本街村型。長方形街区ではなく、敷地奥行きは一定しない。

町人地を取り込む理由は、領国内の経済・流通を活性化し、生産力を高め国力・武力を増強するため。

また、城郭とその周囲に居住する家臣団の生活を支えるため。

城下全体は身分による居住空間の違いを明確する。

織田信長の出現によって城下町の形が大きく変化する。縦町型城下町を採用。求心的な城下町。

領国支配や流通の便を考慮し、港に近い平野部に城下町が移動する。

城下町の建設に当たっては、造成や整地など大規模な土木工事を行っている。

豊臣秀吉は城下町の形を発展させ、より大きな町が出現する。この時期に縦町から横町へと変化する。

関ヶ原合戦後に築かれた城下町は長方形街区が採用され、敷地奥行きが同じ横町型町人地を持つ。

室町時代末から江戸時代初めまでの約 50 年の中で、城郭だけでなく城下町の形も変化してきた。

戦争によって道路が整備され、全国規模の経済・流通網が完成したことで町の形が変わってきた。

日本各地の城館を観察すると、その変化が追える。

戦国期 → 織田期 → 豊臣期 → 徳川期と、城下町の形が変わっていった。

出雲においても戦国期の富田城城下町と近世の松江城下町とでは立地場所や形も違っていた。

山間部の富田を捨て、領国内の交通の便が良く、港に近い海浜部の松江を選択する。

2. 富田（広瀬）

尼子氏の居城であった富田城の山麓には尼子家臣団の屋敷や寺院、町人地があったことが推定できる。

しかし、その城下町は堀尾氏の松江移転や寛文6年（1666）の飯梨川の氾濫によって消滅した。

尼子氏の富田城は天文年間（16世紀中頃）以前に遡り、毛利氏が入る永禄9年（1566）まで。

尼子氏の富田城下町は、山城＋山麓居館＋寺院＋家臣団屋敷＋直属商工業者屋敷で、小規模。

越前朝倉氏の一乗谷や近江浅井氏の小谷の城下町、毛利氏の吉田郡山の城下町に近い。

永禄9年から慶長5年（1600）までは毛利氏・吉川氏の城下町。

天正19年（1591）には吉川広家が富田城に入り、城郭整備を行う。同時に城下町の整備を行った？

慶長5年、堀尾氏が富田城に入る。慶長12年（1607）の松江城築城工事着手までの間に城郭整備を行う。

堀尾氏も24万石の大名となって家臣団も増えており、城下町の改造・拡大を進めたと推定できる。

慶長13年頃、松江移転。⇒ 富田城下町から家臣団の移動。寺院も移動（『雲陽誌』では18カ寺）。

現在の飯梨川河川敷での発掘調査で、寺院跡や町屋跡など城下町の一画が発見される。

城下町は飯梨川河川敷を含め、それより東の富田城の山麓に展開。

吉川氏・堀尾氏が建設した城下町は、尼子氏段階の城下町とは異なり、身分制に基づく町だった。

町人地も短冊型地割が集まった両側町であったと想像したい。

河川敷で見つかった江戸時代の町は、幅3間（約6m）の道路に間口を開く両側町。

この町は吉川氏・堀尾氏が建設した城下町の形を踏襲していると推定できる。

寛文6年（1666）の洪水で残った町を川の西に移転させ、現在の広瀬町ができた。

松平期に建設された広瀬藩の陣屋町は、敷地の奥行きが同じ長さの横町型となっている。

高台に陣屋、陣屋の周囲に役所や武家地、低い場所に街道（本町通り・上町通り）を取り込んだ町人地。

陣屋＋武家地と町人地の間には堀を通し、身分による居住空間を区分している。

町全体を堀（河川）で囲う。

本町・上町の町人地は各戸の奥行きを均等にする。

上町の南街区では長方形街区の中央に町境となる背割線（溝）を通す。

街道に沿う町人地は奥行きが長く、外縁にある町人地は地形に制約され街区が不揃い。

外周が直線ではない。外周の南側は川に近いので低くなっている。

日本各地にある近世初頭に建設された小規模城下町や陣屋町と同じ構造。類例は非常に多い。

広瀬と同じ年（寛文6年 1666）に支藩となった母里藩陣屋町も規模や形は違うが基本構造は同じ。

寛永10年（1633）の「出雲国図」記載の富田庄は飯梨川の東にあり、寛文6年の洪水前の位置。

3. 三刀屋

雲南市三刀屋の町は斐伊川の支流、三刀屋川の右岸にある。

三刀屋川の対岸にある城山の山頂に三刀屋城が築かれている。

三刀屋城は「出雲国図」の検討から、松江城の支城の一つと推定されている。

三刀屋城と現在の三刀屋の町の間には幅が100mほどの三刀屋川があり、城と町を分断している。
分断された町だったのか？

『三刀屋町誌』の「三刀屋の町」では、天正年間に身分制による町を建設し、町人を集めたとする。
その場所は古町と呼ばれ、現在の旭町付近とする。

それまでの居住地は不明。武士と町人が混在して住んでいたのを分けたのなら、三刀屋川の北か？
天正年間までは三刀屋城の山麓に町人地があったと想定できる。

小規模ではあるが、毛利氏の吉田郡山城下町や近江観音寺城下町を想起させる。

ただ、三刀屋城は天正16年(1588)、毛利輝元の時に廃城になっている。

町の移動は天正年間ではなく、慶長5年以降の堀尾期と考えたほうが妥当。

その後、慶長5年から寛永期までは川の南にある旭町(古町)が町人地となっていた。

現在、古町の故地とされる旭町の南山麓には善徳寺・西雲寺・浄土寺・妙法寺が並ぶ。

町人地の背後を囲むような配置。寺町？慶長年間に町とともに移転してきた寺院か？

古町は江戸時代の寛永年間の洪水のため、現在の上町に移転してきたとする。

町は移転しても寺院は高台にあったため、移転しなかった？

人工的な堤防で固定される以前の近世においては、三刀屋川は氾濫を繰り返す暴れ川だったと推定できる。

島根県の「三刀屋川浸水想定区域図」では北の旭町を含む一帯は2～5mの浸水域となる。古町付近が低い。

現在の下町・中町・上町は『三刀屋町誌』によると寛永年間以降に建設された町。

自然地形を無視した人工的な直線道路を敷設し、その両側に奥行きが均等な短冊型地割が並ぶ。

町の形は両側町で近世の町の姿。

一本街村で、通りに直行する筋に間口を開く敷地はない。

現在の町と三刀屋城を繋ぐ大手通りと言える道路が無い。

三刀屋城とは無関係に建設されており、三刀屋城廃城後に建設されたと想定できる町の姿。

雲南地域の在郷町として発展。

城が機能していた天正以前の城下町は三刀屋城の山麓に、天正から寛永までは川南の旭町に城下町があった。

4. 赤名

飯南町赤名は出雲市の長浜海岸に注ぐ神戸川の最上流に位置し、出雲街道と銀山街道が交差する要衝。

赤名瀬戸山城は戦国期には争奪を繰り返す城であり、堀尾期には松田左近が城番として入った。

城下町は瀬戸山城の西山麓にあり、神戸川が削った谷あいの小さな盆地にある。

赤名と北の下赤名との境は山塊が東西から伸びてきて、狭隘な谷地形をさらに狭くしている。

上流の上赤名との境も東西から山が迫って狭い谷となっており、赤名は谷の中で小さな盆地の中にある。

町の中を通る道路は近代まで出雲街道・銀山街道として山陰と山陽を繋ぐ道路であった。

赤名の町人地はこの街道の両側に建ち並んだ家々で構成されている。

東の瀬戸山城から西の神戸川までの間に広がる扇状地部分と河岸段丘の平坦面に町が建設されている。

赤名の町人地の通り（街道）は、蛇行する神戸川に沿うことなく、段丘平坦面上をほぼ直線で通る。道の両側に奥行きが同じ短冊型地割を配置するために、北端で道路を屈曲させて平坦面の中央を通して。北端の屈曲は町の防御というより、道路の両側に均等な奥行きの地割をつくるための工夫と考える。町の南端は同じ奥行きの地割が取れない所まで。そこで道路が神戸川に規制されて折れ曲がる。人工的に設計・建設された町とわかる。

町人地の東には山に続く緩斜面（扇状地）があり、寺院や小学校などの広い敷地の区画が並ぶ。小学校とその南にある県営衣掛団地は公有地であり、「殿町」の字名がある。

この一帯は瀬戸山城が機能していた時期には山麓居館や家臣団屋敷となっていた区画と推定できる。赤名の町人地との境には細い道路があり、町人地の敷地境となっているが、直線ではない。

町人地は町通りと同じ高さに切土して造成されているが、東側の広い区画とは1m以上の段差がある。町人地と広い区画の間の細い道には町人地の入口はなく、当初は道ではなかった可能性がある。

神戸川側の町通りの西側の町人地の背後もほぼ直線の敷地境が設定されている。

町人地と神戸川の間には町人地とは異なった広い区画がある。近世には耕作地があったのではないかと。「町並みは三本の通りから構成されて」とする見解〔中井 2013〕があるが、中央の通りだけと考える。

赤名町の建設時期は町の形から慶長期以降と考えられ、堀尾氏が瀬戸山城を支城とした時期と考える。赤名城下町は、東に山城、山麓に居館と武家屋敷地さらには寺院、その下段に城下を貫通する街道と横町型町人地があり、全体を河川（神戸川）で囲う形となっている。

堀尾期以前の町は赤名の北、下赤名に「字古市」があり、その場所が町人地となっていたようだ。古市は神戸川左岸の段丘上に位置し、地籍図でも道路の両側に奥に長く幅の狭い敷地が揃っている。身分制に則った居住空間の配置や町人地の形から近世初頭の城下町の典型的な形といえる。

5. 亀嵩

亀嵩城は「出雲国図」に「古城」と記載された城。

堀尾期には松江城の支城と位置づけられる。元和元年の一国一城令で破却されるまでの城と城下。

亀嵩城は土塁や堀切も無く、石垣も無い極めて単純な構造。

織豊期以前で、戦国時代後半の城に見られる防御の工夫が発達していない〔松江市史編纂室 2017〕。

亀嵩城の北側に亀嵩町へと続く谷があり、その下の開けた谷には覚融寺がある。

覚融寺は、堀尾期に亀嵩城に番衆を入れ置くために建設されたとの文書が残る。

中世亀嵩城を国境警備の詰城として利用し、番衆を覚融寺や谷の中の平坦地に置いたと言われている。

谷の入口には亀嵩川が流れ、堀のような役割を果たしていたとも考えられる。

亀嵩川までの範囲を、山城＋山麓居館＋家臣団屋敷で構成される亀嵩城下と理解することが可能。

堀尾期以前の中世的城下の姿。中世は城と家臣団屋敷でなる根小屋から離れて市や町が立地している。

亀嵩川の西に直線道路の両側に家が建ち並ぶ亀嵩の町がある。

亀嵩村道路元標のあるT字路まで直線道路が敷設され、両側には奥行きがほぼ均等な短冊型地割が並ぶ。

町の形の不自然さから、人工的に敷設された道路と推定できる。町の形は近世初頭に出現する両側町。地籍図には「字町屋敷」とある。町の南外の字は「町尻」と「市ノ後」。

北側の突き当たりのT字路の場所は「字札場」と「字古屋敷」の地名がある。

「古屋敷」の謂れは不明であるが、その位置や札場（高札場）などから町の要であったと推定できる。

町の西側は高台になり、墓地と寺院が配置される。覚念寺・聞善寺・十満寺が並ぶ。

町人地の構造や寺院の配置は赤名と共通するが、町に接して武家地や居館があったとの伝承はない。

堀尾期も武家屋敷地は覚融寺のある亀嵩城山麓の谷に展開していた？

人工的な直線道路の両側に建設されている形は、堀尾期に町人地として改造された可能性がある。

町人地西側に並ぶ寺院の背後に武家地があれば、赤名城下町と同じ構造。

6. 三沢

「出雲国図」に「古城」とは記載されていないが、石垣を築いた三沢城があり、その麓にある。

石垣を築いていることから、堀尾氏入国以降とする[松江市史編纂室2017]。

ただ、石垣は大手部分にのみ築かれ、本丸部に石垣を築いた瀬戸山城や三刀屋城とは趣を異にする。

石垣の構築技術にも違いがある。堀尾氏による改造ではない？

大手口下の山腹には家臣団屋敷の存在を窺わせる地名や、四日市という地名がある。

山腹から谷あいには城下町があったと想定されており、近世的な姿ではなく、戦国期の姿。

構造は「山城+山麓居館+家臣団屋敷+市」で、四日市地名が残る一帯には短冊型地割の痕跡が無い。

三沢城と城下は東側山腹の家臣団屋敷・四日市を要害山山頂から下る尾根で囲んだ範囲か。

類例では越前朝倉氏の一乗谷や近江浅井氏の小谷の城下町、近江観音寺城下、丹波八上の城下などがある。

その範囲の外に位置する三沢町は堀尾期に建設された近世城下町とは考えにくい。

山城+山麓居館+家臣団屋敷+市という中世城下町の外側の街道沿いに町人地がある姿。

三沢町は三沢城から離れた街道沿いに成立していた市の可能性がある。

三沢町の構造は先の支城城下町と比較すると、道路が人工的な直線ではなく、自然地形を克服していない。

三沢城は堀尾期には支城ではなかった？

三沢町は中世の城館が廃絶した後も流通の中継点として、この地域の在郷町として存続した。

7. 他地域の町

都市規模の大小に拘わらず「山城+山麓居館+武家屋敷地+直線の横町型町人地」という構造を持つ近世初頭に建設された城下町は各地に見出せる。

岐阜県 郡上市郡上八幡（2万7千石）

滋賀県 甲賀市水口岡山（中村一氏→増田長盛→長束正家→廃城）

奈良県 高市郡高取町（2万5千石）・宇陀市松山（織田信勝2万8千石→天領）・五條市五條新町（1万石）・生駒郡龍田町（2万8千石）

京都府 南丹市園部 (3 万石)

大阪府 豊能郡能勢町地黄 (7 千 800 石)

兵庫県 豊岡市出石 (5 万石)・朝来市竹田 (関ヶ原の戦い後廃城)・養父市八鹿町八木 (関ヶ原の戦い後廃城)・佐用郡佐用町平福 (2 万 5 千石)・丹波市春日町黒井 (天正 10 年堀尾吉晴→廃城)・丹波市柏原 (織田信包 3 万 6 千石→織田信休 2 万石)・小野市小野 (1 万石)

鳥取県 倉吉市打吹 (廃城)

岡山県 岡山市足守 (2 万 5 千石)

広島県 庄原市東城 (1 万石)

※お断り 以上に掲げた町のほかにも同じ形の町が多く存在している。レジュメ作成時に思いついた町だけを書き上げている。

まとめ

堀尾期の支城城下町は中世末から近世初頭に建設された日本各地の城下町と同じ構造。

堀尾期の**富田**は尼子期の町を踏襲しており、城館に近接した場所に町人地があった。

その町は寛文 6 年 (1666) の洪水で埋没。現在の広瀬町は松平期の姿。

現在の**三刀屋**は元和元年の一国一城令によって、三刀屋城廃城後の寛永期に建設された町。

中世から堀尾期の三刀屋は移転を繰り返し、現在の町の地下に埋もれている。

赤名の現在の町の姿は瀬戸山城とともに堀尾期の姿をとどめている。

山城＋山麓居館＋武家屋敷地＋直線の横町型町人地の典型的な姿。

亀嵩は武家地から離れた場所にあった市を利用して建設された町人地か。

元和元年の一国一城令によって支城が廃棄されたため、武士が松江に戻り、町人だけの町となった。

三沢は中世段階には字八日市までを含んでいた城下の範囲外で、三沢町は外の市だった可能性がある。

堀尾期の支城城下町は、松平期には地域の経済活動の中心となる在郷町となっていた。

松平期に支藩の城下町となった広瀬は再び繁栄を取り戻した。

引用文献

小島道博 1990、「戦国・織豊時代の城下町」『日本都市史入門』Ⅱ、東京大学出版会

中井均 2012、「堀尾氏の出雲支配における支城について (1) —三刀屋尾崎城—」『松江城研究』1

中井均 2013、「堀尾氏の出雲支配における支城について (2) —赤名瀬戸山城—」『松江城研究』2

前川要 1991、『都市考古学の研究』柏書房

松江市史編纂室 2017、『別編松江市史 松江城』

三刀屋町教育委員会 1982、『三刀屋町誌』

矢守一彦 1988、『城下町のかたち』筑摩書房

吉田町教育委員会 1988、『史跡毛利氏城跡保存管理計画策定報告書』